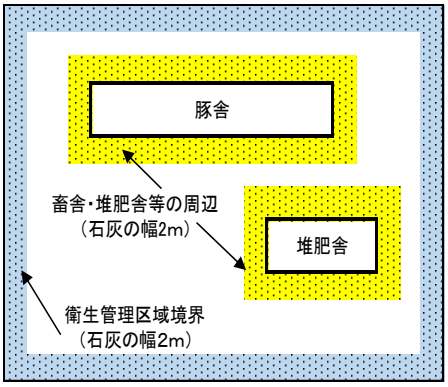
５　畜　　産

項　　目	作　　業　　内　　容
	（今月の作業のポイント） ○豚熱（CSF）の予防対策の強化 ○幼畜の飼養管理
（１）豚熱(CSF)の予防対策の強化	10 月７日　大洲市の養豚農場において本県２例目となる豚熱（CSF）の発生が確認された。県内の野生イノシシの豚熱感染事例も 55 例(10 月 19 日時点)確認されており、CSF ウイルス侵入リスクは高まっている。現在、国内で発生している CSF は特徴的な症状がみられず、感染が気づきにくい場合が多いため、発熱、食欲不振、元気消失のほか、うずくまりや呼吸障害等を発見した時は、まず CSF を疑い家畜保健衛生所へ速やかに通報する。予防対策では、飼養衛生管理基準に基づく定期的な点検と、修繕箇所等があれば直ちに修繕することを徹底する。 ア　人・物・車両によるウイルスの侵入防止 ・衛生管理区域、豚舎への出入りの際の洗浄、消毒、石灰帯の設置（図１）を徹底する。 ・衛生管理区域専用の衣服、靴を用意し使用を徹底する。 ・人等の出入りを記録する。 イ　野生動物対策 ・豚舎、飼料保管場所等へのネズミ等の野生動物の侵入を、防護柵・捕獲装置や殺鼠剤を継続的に使用して防止するとともに、豚舎周囲の清掃、整理整頓を定期的に行う。  図１　消石灰の散布方法 （畜舎や衛生管理区域境界等に2mの幅で消石灰を散布する）
（２）幼畜の飼養管理	11 月になると夜間の気温（最低気温）が 10℃を下回るようになり(表１)、寒さに弱い幼畜には大きなストレスとなる(表２)。この時期は、下痢や呼吸器病等を発症しやすいため、衛生管理にも注意が必要となる。 ア　子牛 子牛は寒さに弱いため、床には乾燥した敷料を多く入れ、冷たい風が直接体に当たらないように、牛舎内への吹き込み場所を確認し開口部をふさぐ等の対策を取る。特に、分娩直後の新生子牛は、体表面の水分を十分に拭きとり、気温が低い場合に

項　　目	作　　業　　内　　容

は家畜用コルツヒーター（写真１）等を利用して保温する。

表１　日最低気温の平年値

	10 月	11 月
西条	14.5 ℃	8.8 ℃
久万	9.8 ℃	4.0 ℃
大洲	13.6 ℃	8.0 ℃
宇和	12.5 ℃	6.8 ℃
近永	13.0 ℃	7.1 ℃

表２　幼畜の適温域（三村）

畜種	適温域
哺乳子牛	13～25℃
育成牛	４～20℃
育成豚	15～27℃

肥育用の乳用種雄子牛や交雑種の子牛は、集団で飼育されるため、肺炎や下痢等を蔓延させないよう日常の観察を十分に行い、異常があれば直ちに獣医師の診療を受ける。



写真１　コルツヒーター

イ　子豚

子豚の寒さによる事故は、出生後１～３日が最も多く、離乳期（生後４週間）では 20℃、３カ月齢で 15℃を下回らないように保温を心掛ける。母豚による圧死を防止するため、子豚の重なり具合等を確認し、保温灯や保温箱の設置、すき間をふさぐ等の対策を行うとともに、適正な湿度管理（相対湿度 65～75%）にも留意する。

ウ　換気対策

気温が低く乾燥するこれからの時期は、ウイルス等が生息しやすい環境になり、呼吸器粘膜等の防御機能が低下し病原体が侵入しやすくなる。このため、アンモニアやほこり等を除去するための換気を、急激な温度変化に注意しながら定期的に行う。

（作成　畜産研究センター）